

於て、漠北に於る回鶻の根據地々方に所謂回鶻文字が行はれたる證左と爲すには足らず。

此の碑文の外には漠北時代の回鶻の文献の今日に知らるゝもの極めて少く、僅に Ramsted 氏が *Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei* と題して發表せるものを擧げ得べきのみ、此の中の第一は突厥文字を以て書ける墓誌にして、然も回鶻人の製作に係り、Jaglakar kan ata にて、黠戛斯 (Kirghiz) 人の子なれども、回鶻に在りたるものゝ爲に作られたるものなり、其の所在地は庫倫と Selenga 河との間、Araskhatu 丘の西南西、Dolon-khuduk (七井) の東南東なる Südžin-dawā といふ岡の南方の坂に當れり、此の墓誌中の一節には、其の師に人百人と住所とを寄與したる」と記せるが、師なる語は Mar と記され、既に Thomsen 氏が Ramsted 氏に與へたる書翰に見ゆるが如く、摩尼教及びネストル派基督教の教士を呼ぶに用ゐたる語<sup>(15)</sup>なり、而して此の場合に於ては、Chavannes 氏も既に考へたるが如く、勿論摩尼教士を指せる」と明らかなれば、此の墓誌は回鶻に摩尼教の流行したことと證明すべき根本史料の一なりとす、而して注意すべきことは、かく回鶻に摩尼教の行はるゝに至りたるより後、其の教を奉じたるものゝ墓誌を記するに當り、之に用ゐられたる文字は所謂回鶻文字に非ずして、尙舊來の突厥文字なること之なり、Ramsted 氏の解説せる第一のものは、亦突厥文字を以て記せるゝ碑文にして、tängridä bolniš il itniš bilgä kagan 卽ち天寶六載 (七四七) より乾元二年 (七五九) 迄治世し、唐書に葛勒可汗磨延啜と記れるゝ回鶻可汗の爲に、額魯赫特 (Örgötü) 山谷 Šine-usu 湖の北方なる其の墓上に建てられたるものなり、此の如く回鶻が尙漠北に據りし時代の文献には、一として回鶻文字が用ゐられたる證左の存するもの無く、却りて其の間に突厥文字の用ゐられたる證據は、摩尼教輸入の前後何れの時代に於ても歴然として存する